



研究集録10

神戸大学教育学部附属養護学校

(Citation)

研究集録, 10:0, 2-11

(Issue Date)

1984-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009911>



研究集録 10
(昭和58年度)

障害と発達に視点をあてた教育内容と方法の創造

神戸大学教育学部附属養護学校

も く じ

はじめて	1
本年度研究の経過	4
本校教育の課題	
教育課程の概要	21
• 学部目標 • 教育課程構造図 • 集団編成と日課表	
• 教育課程編成上の諸問題	
教育実践カルテ 学習活動分析評価表の作成	29
今年度各教科題材一覧表	62

テーマ別研究報告

◦ みんなでとりくむ体育学習の在り方	71
◦ 本校におけるリズム遊びの指導法について	84
◦ 子どもの日常動作のステップ化 ― 基本的生活習慣を中心に ―	98
◦ 発達に視点をあてた教育実践のすすめ方	109
◦ 児童・生徒及び卒業生の障害と発達の状況・生徒実態を把握する方法、.....	117
そのデータを整理し、活用する方法の検討 ― マイクロコンピュータの活用法 ―	
◦ 「ことば」と「イメージ」について	121

実践報告

小学部

◦ 生 活	人とのかかわり遊び（おすもうをしよう）	143
◦ こ と ば	話しことばを豊かにする「ことば」の授業をめざして	146
◦ か ず	数の世界への導入をめざす土台づくり（数以前の指導）	149
◦ 音 楽	リズムあそび ― 「赤鬼と青鬼のタンゴ」	155
	（学習発表会への取り組み）	

◦ えがく・つくる	ねんどあそび — 手指のはたらきをたかめるために —	158
◦ 体 育	みんなが参加できる体育づくりをめざして	165
	— 「フープ運動」の取り組み —	

中 学 部

◦ 生 活	協同製作を通して学級集団の質的な高まりをめざす	169
	— くつ置きだなの製作 —	
◦ 合同生活	「合同生活」について考える	172
◦ 国語・数学	笑顔による共感関係のとりむすびを中心とした「ことば」への導入	175
◦ 国語・数学	仲間集めの学習を通して	180
◦ 体 育	みんながとりくめる体育の授業をめざして	184
	— 「ハードル運動」のとりくみ —	
◦ 家庭科	中学部における家庭科の指導について	187
◦ 家庭科	発達段階に幅のあるクラスでの調理実習	192
	— 重度の生徒にとっての調理実習について —	

高 等 部

◦ 生 活	学習発表会にむけて，劇「夕づる」のとりくみ	196
◦ 数	数量指導と測定	204
◦ 音 楽	合奏へのアプローチ（ハンドベルを使って）	209
◦ 体 育	体の育ちは目的性と集団性の高まりの中で	212
◦ 家 庭	手さげかばんの毛糸ししゅうをしよう	221
◦ 生産（木工）	ベンチづくりの実践を通して	227
◦ 58年度高等部卒業生の進路指導を終えて		234
	おわりに	239

本年度研究の経過

研究推進委員会

研究推進の方針（1983.4.22 教官会議）

1. 研究推進の基本的な方針 — 附属学校としての本校の課題と研究推進の意義 —

「すべての子どもはひとしく教育を受ける権利を……」という日本国憲法、教育基本法の規定を完全実現化させる第一歩をふみだした1979年養護学校義務制から5年めを迎えた今日、障害と発達、生活条件、生活実態に視点をおいた科学的な教育内容・教育課程を実践を積み重ねるなかで創造発展させていくことが重要な課題となっている。とりわけ障害の重い子の教育について、発達の可能性やすじみちがわかるか、具体的にどう指導していけばよいか、その教育内容と方法が切実に求められている。

附属学校という性格から、本校独自の課題はかかえているとしても、「地域に根ざす学校」（S.57入学選考方針）をめざすという場合、今日の障害児教育の課題は例外でありえない。父母の願いをうけとめ、すべての子どものゆたかな発達をめざす教育を推進していくことは子どもの教育に直接責任を負う立場からして当然のことである。とりわけ、学部研究室と継続的、組織的なつながりをもちながら、新しい試みをくみこんだ研究と実践を積み重ねていくことが研究が中核となる附属学校の任務であり、このことが障害児教育にたずさわる多くの人々の要求に応えていくみちである。また、教員養成の課題についても、私たちの教育力量をたかめていくことが教育実習指導のなかみをよりゆたかにふくらませるものとなり、この点からも研究の推進が最重要課題として追求されなければならない。

今年度は、教官ひとりひとりの要求にもとづく自主的な研究テーマを設定することからとりくみを開始し研究体制を確立させる。それは、教育のしごとは一人ひとりの教師の自主性と自覚性を基礎においているということを前提にしているが、このことは、一人ひとりの教官の恣意にまかされるものでないことは無論である。「障害を受けている子どもたちの発達を保障する」ことが求められている私たちの責務からして、けっして矛盾するものではない。また、教育のしごとが、とりわけ養護学校の場合、教師集団の力を結集することが強く求められており、教官どおしの学び合いを研究推進の原動力としていきたい。

研究推進委員会は、「研究全般の円滑な推進、個々の調整等」の任務は当然であるが、それにとどまらず、全校的な研究を推進していく責任を負うものである。

2. 研究推進の具体的な方針

(1) 研究グループの確立とその推進について

① 第2回研究推進委員会(5月13日)までに、各人「研究テーマ」を委員会に提出する。

それまでに、小集会、ミニ集会を多様にもつ。それをうけて委員会は調整を行ないグループを確立し、5月18日研究会実施をめざす。

② 推進については、各グループの主体的なとりくみに一任するが、推進や運営については委員会が援助することもある。また、学びあい、たかまりあうことを大切にし、グループの研究を励ます意味をこめて学期に一回「全体研究会」を実施する。研究の方向、中間報告、年度末報告をそれぞれの中心課題とする。まとめを集録として編集する。

(2) 学部内での研究の推進について

① 日常の教育実践について必要なことは、学部研究会として協議し研究をすすめる。

教育課程、指導計画、児童生徒の実態把握(発達検査、診断)、実践の総括等。

② 教育実習生の指導については、学部研究として位置づける。

③ 研究日でまかないきれないときは、学部会でも学部研究を行う。

(3) 授業研究会の実施について

私たちの教育力量をつちかう場として、「授業研究会」を重要視する。教生指導授業を授業研究としてあつかうが、各グループ、各学部で主体的に実施されることを要望する。

(4) 対外的な研究会の実施について

① 県教委合同研を実施する。その内容、方法等については、年度のおそくない時期に県教委と協議する。

② 教育学部研究室とのつながりについては、本校の研究体制の確立の進展とあわせながら方針を提起する。

(5) 研究出張について

研究出張は、他の多くの実践や理論を学び、私たちの研究・実践内容をたかめ発展させていくための機会であり、積極的に保障していくことにする。研究出張にかかわる総括的な調整とその推進については、研究推進委員会が責任を負う。

(6) 研究図書の整備と充実について

図書の購入については、希望を尊重しながら、研究内容、研究分野等の観点から考慮して研究推進委員会でおこなう。

とりくみとその反省、次年度の方向（1984.3.16.教官会議「年度末総括」）

1. 基本の方針について

附属学校として本校の果さなければならない役割りや課題について、また研究活動のしめる位置づけ等について、単にスローガンとしてかかげるにとどめず、どのような学校づくりをすすめるのかという課題と合わせて、あらゆる機会に論議をつみかさねていく必要がある。

全校の研究主題は、従来の「障害と発達に視点をあてた教育内容と方法の創造」を基盤とし、教育実践研究を中心とすべきであろう。また、研究の方法についても、一定方向を提起しながら論議をすすめていくべきであろう。

研究推進委員会は、「研究全般の円滑な推進・個々の調整等」にとどまり、「指導していく」面にはおよばなかった。どこに問題があり、何が問題点なのかを把握しえない委員会そのものの弱点があった。

2. テーマ別研究について

5月12日、各自の自主研究テーマの報告を求め、グループの調整を実施し、5月18日に第一回のテーマ別研究会を発足させた。6テーマのグループを生み、年間14回実施した。「自主・民主・公開」の原則のもとに、あくまで自主研究であることを主眼とし、研推委としては、時間と予算の保障、報告を求めるにとどめた。全体研究会は、一学期と三学期に実施したが、当初のねらいとしていた「共通の基盤をさぐり統一テーマを」という目標に迫ることができなかった。自主研と統一テーマとは相入れないものかどうか、ひきつづき検討を加えていきたい。

今後のすすめ方について、各グループとも次年度に向けての課題を設定しており継続の必要性が述べられている。テーマ別研をどう発展させていくかについて、「授業実践の場である学部の研究を深めていく理論的うらうちをする、教科研究会のような位置づけは考えられないか」という意見、「教科研や学部研でまかないきれないものがテーマ別研であり、まったく自主的な、いわゆるサーワル活動化させてもいいのではないか」という意見も出されている。

次年度もひきつづき自主テーマ別研究を実施していくが、研究推進委員会は時間と予算の保障にとどめ、「自主・民主・公開」の原則がとらぬかれるかぎり、すべて自主的運営にゆだねたい。一方、学部をこえて話しあうことの大切さもテーマ別研の中から生まれている。各学部の実践交流を中心にした「教科等研究会」を組織していくことも検討する必要があります。

3. 学部研究の推進について

児童生徒の障害と発達に視点をあてとりくみを始めるべく、「課題、援助の方向」を明らかにした、「教育実践カルテ・学習活動分析評価表」を作成した。また、学期ごとに実践記録を作成したが、集団討議が不十分であったり、検討されないままの状態である。授業計画、実践、総括も、担当者まかせとなっており、「こんなとりくみ、こんな授業でよいのか」という悩みを解消するすじみちを考える必要がある。「よい授業をみんなのちえと力で」という要求に応えていくために、授業の準備等をふくめた「学部研究会」の充実をはからなければならない、養護学校の実践の基礎集団は学部の指導者集団である。

現体制の中で、学部研究会の時間を保障していくために、学部会、学部研究会の設定についても再考すべき時期であろう。

4. 授業研究会の実施について

県教委合同研と合わせて、全校授業研究会を一回実施した。他の学部の授業を1時間みるという機会は、よい学習の場となった。学部単位で授業前研究がとりくまれたが、事後研究が不十分な状況である。

体制をとるべく努力しながら、全校授業研究会を組織していく必要に迫られている。教生指導のうえからも、「授業をつくり出す力、授業をみる眼、授業を検討する力」をつちかうことが求められている。

5. 対外的な研究会の実施について

第8回県教委合同研究会を、本校の授業研究会とあわせて実施することにした。義務教育課から2名、障害児教育センターから1名来校された。本校教育の課題について説明のあと授業研究の指導助言をうけた。県教委合同研は、その意義とねらいを明確にし、事前の協議を十分につくして実施されなければならないという指摘が今年もされている。いわゆる県教委の「学校訪問」的になることは避けなければならない。

教育学部研究室とは、二学期より研究科学生を中心にした「数学教育研究室」とのつながりを開始した。「ちえおくれの子の数指導」について、研究を深めていく足場となった。また、「特殊教育研究室」とは、坂本龍生先生を三回にわたってお招きし「感覚統合論」の学習会を実施した。学部研究室とのつながりは、附属学校として当然の任務であり、特殊教育研究室を中心にして継続していきたいと考えている。

研究協議会は56年来実施していない。なんらかの方針を出す必要に迫られているが、「やるのか——やらないのか」という二者択一の論議だけが先行しては、実りのある決定をみた

り、合意を得ることは困難である。研究のすすめ方等について論議をつみかさねていく中で研究協議会の意義、実施方法等、全員の合意をつくっていくべきであろう。

6. 研究出張と研究図書について

研究出張については、希望を尊重しながらその調整にあたり、出張後は報告を求め「研推ニュース」にのせるとりくみをしてきた。県養研、近精養などの組織加盟の研究会にとどまらず、各人の要望が優先されるような計画が望まれている。そのためには、研究出張旅費の増額が緊急の重点課題となっている。

研究図書については、年間二期にわたり、希望を聞き購入した。研究室の整備とあわせて図書の整理も研究推進を支える課題としてとりくまれる必要がある。

7. 研究集録の編集について

本年度の研究と実践のとりくみの年次記録として編集することにした。また、本校の教育内容、課題が明らかになるような中身とすることにした。一方、実践をまとめるという「かく」作業は、実践のたしかめ、問題点や課題がより明らかになり、私たちの教育力量をたかめるものであると考え、各人の要求にもとづく「実践報告」を求めるという試みにとりくんだ。

8. その他、次年度に向けての課題について

子どもひとりひとりの障害と発達の状況をより科学的に把握するために、発達診断にとりくまなければならない。同時に、各学部、ややもすると不揃いであったものを、全校的に統一していく必要があり、次年度がその出発の年となることを願っている。

研究推進の日程

月	研 究 会	授 業 研 究	研 究 推 進 委 員 会
4	13. 学 部 研 究 会 20. 学 部 研 究 会 27. 学 部 研 究 会		12. 第 1 回研究推進委員会 (研究推進の方針 年間計画)
5	18. テーマ別研究会 25. テーマ別研究会		2. 研究推進ニュースNo.1 9. 研究推進ニュースNo.2 13. 第 2 回研究推進委員会 (テーマ別研の推進 研究出張の方針) 16. 研究推進ニュースNo.3 18. 研究推進ニュースNo.4 23. 研究推進ニュースNo.5 24. 研究推進ニュースNo.6 30. 研究推進ニュースNo.7
6	1. テーマ別研究会 8. 学 部 研 究 会 15. テーマ別研究会 22. 学 部 別 研 究 会 29. テーマ別研究会	13. 音楽(小・摺元) 14. 家庭(中・坂井) 14. 数(高・足立)	3. 第 3 回研究推進委員会 (テーマ別のとりくみ 授業研究のとりくみ) 6. 研究推進ニュースNo.8 10. 第 4 回臨時研究推進委員会(近養研中学部会) 13. 研究推進ニュースNo.9 20. 研究推進ニュースNo.10 27. 第 5 回臨時研究推進委員会(全体研実施計画) 研究推進ニュースNo.11
7 ・ 8	6. 第一学期全体研究会 23. 学部研究会(中・高) 28. 学部研究会(高) 8. 28. 学部研究会(高)	9. 生活(高・松永)	3. 研究推進ニュースNo.12 8. 研究推進ニュースNo.13 5. 第 6 回研究推進委員会 (全体研, 研究出張旅費 予算) 18. 研究推進ニュースNo.14

月	研 究 会	授 業 研 究	研 究 推 進 委 員 会
9	7. 学 部 研 究 会 14. 学 部 研 究 会 21. テーマ別研究会 28. 学 部 研 究 会		2. 研究推進ニュース№15 5. 研究推進ニュース№16 9. 第7回研究推進委員会 (県教委合同研実施計画) 12. 研究推進ニュース№17 19. 研究推進ニュース№18 26. 研究推進ニュース№19
10	5. 学 部 研 究 会 11. 県教委・附属養合同 研究会 12. テーマ別研究会 19. テーマ別研究会 26. 学部教官・附属養合 同研究会 (第1回感覚統合論 学習会)	3. 体育(高・井沢) 4. 国語・数学(中・小松) 4. えがくつくる(小・原) 5. ことば(小・米沢) 11. 体育(中・森) 11. 体育(小・梶本) 11. 数(高・梅田)	3. 研究推進ニュース№20 7. 第8回研究推進委員会 (学部教官合同実施計画) 11. 研究推進ニュース№21 17. 研究推進ニュース№22 24. 研究推進ニュース№23 28. 研究推進ニュース№24 31. 研究推進ニュース№25
11	9. 県 養 研 交 流 会 (いなみ野養) 15. 県 養 研 中 学 部 会 (本 校) 学部研究会(小・高) 18. 学部教官・附属養合 同研究会 (第2回感覚統合論 学習会) 30. テーマ別研究会	21. 生活(小・空井) 22. 基礎(中・中山) 22. 家庭(高・広石) 15. 生活(中・米田)	4. 研究推進ニュース№26 研究推進ニュース№27 8. 第9回研究推進委員会 (学部合同研の推進) 9. 研究推進ニュース№28 14. 研究推進ニュース№29 21. 研究推進ニュース№30 28 研究推進ニュース№31
12		音楽(高・中川)	5. 研究推進ニュース№32 6. 第10回研究推進委員会 (三学期研究推進日程) 8. 研究推進ニュース№33 12. 研究推進ニュース№34 14. 研究推進ニュース№35 16. 研究推進ニュース№36

月	研 究 会	授 業 研 究	研 究 推 進 委 員 会
1	11. 学部教官・附属養合同研究会 (第3回感覚統合論 学習会) 18. テーマ別研究会 25. テーマ別研究会		10. 研究推進ニュース№37 10. 第11回研究推進委員会 (研究集録作成計画) 17. 研究推進ニュース№38 18. 研究推進ニュース№39 25. 研究推進ニュース№40
2	8. 学 部 研 究 会 15. テーマ別研究会 22. テーマ別研究会 29. テーマ別研究会	13. 生活(中・八木) 14. 生活(高・長谷川) かず(小・津田)	2. 研究推進ニュース№41 3. 第12回研究推進委員会 (拡大研推委の設定) 6. 研究推進ニュース№42 7. 第13回臨時拡大研究推進 委員会 (テーマ別研究の現状と 課題) 9. 研究推進ニュース№43 15. 研究推進ニュース№44 21. 研究推進ニュース№45 24. 研究推進ニュース№46 28. 研究推進ニュース№47
3	7. 第三学期全体研究会		2. 第14回研究推進委員会 (全体研実施計画) 3. 研究推進ニュース№48 7. 研究推進ニュース№49 9. 第15回研究推進委員会 (年度末総括) 12. 研究推進ニュース№50 26. 第16回研究推進委員会 (研究集録編集) 27. 第17回研究推進委員会 (研究集録編集)